

加西の赤松氏

南北朝時代から室町時代の動乱期に、ここ加西を舞台に展開した赤松武士興亡の歴史の中心武士は、別所町に城を築いた別所氏である。この別所氏が平安時代の終りに別所城を築いてから、戦国時代の天正八年三木釜山城で秀吉の軍に敗れるまでの四百二十年にわたる長い道程について収録した。

殿原城跡をたずねて（笹倉町）

霧の深い十一月始めの朝でした。区長さんの案内で、殿原城主の子孫といわれる加西市笹倉町の長浜さんをたずねました。長浜さん宅は、家号を「本丸」といい、付近の人たちは今もそう呼んでいます。

長浜さん宅に近づきますと、家の裏手の城山と呼ばれている小高い山に生い茂っている老松古杉が、霧の中から頂上だけを浮かび上がらせて、まるで山水画を見るようでした。

長屋門を一步中へ入ると、広々とした屋敷が目に入り、城山をバックに正面に小さなお宮が祀られ、その前は大きな石を並べたみごとな庭園になっています。こころよく出迎えて下さった奥さんの案内で、城があっ

たといわれる城山を見せてもらうことにしました。

城山は、長浜さんの屋敷から一段（約三メートル）高くなっていて、直径百メートル以上と思われる円形の小高い丘です。まわりに、昔は頑丈な土塁をめぐらしていたとのことで、今もところどころにその崩れなかったものが残っていて昔をしのばせます。

その昔、堅牢強固を誇った城も、今は全くその姿を想像することもむずかしいほど、樹木が生い茂り、老樹の間にびっしりからみついていて、つた・かづらが行く手をさえぎります。朝霧に裾^{すそ}をぬらしながら、草木をかきわけて進みますと、この城跡が三段の平坦な円盤を積み重ねたようになっています。中段は直径五十メートル位、最上段は直径十メートル程の高さになっていることがわかります。

「今はこんなに木が大きくなって、視界をさえぎっていますが、ここはずい分見通しのよい所で、殿原盆地はもちろん、遠く印南まで一望できたのですよ」という奥さんの言葉でした。

この城山の中央から、今の長浜さん宅屋敷まで「ぬけ穴」が通じているということで、見せてもらいまし



た。ちょうど、

「先祖をおまつりしたお宮です」

と教えて下さった城神社の下に、ポツカリと無気味な口をあけていました。長い風雪に崩れ、半ばうずまつてはいますが、まぎれもない「ぬけ穴」です。

お屋敷の庭には、当時の堀ぬき井戸もあり、武将がその昔、愛馬をつないだ「駒つなぎ石」も残っています。

この庭に立って城山を見つめていますと、鎧よろいに身をかためた武士たちが、今にも姿を現わしてくるのではないかと、ふと過去に引きこまれる思いです。

(一) 加西と赤松氏

鎌倉・室町時代、今から五・六百年も昔のことです。その頃の日本は、南北朝時代や戦国時代という動乱期をひかえ、人々の心が大きくゆれ動いていた時代です。

この播磨の国、加西の地も例外ではなく、血なまぐさい戦乱が次々に起こり、栄える者、滅びる者、まこ

とに目まぐるしい時代でした。

平安時代の終わりの頃、さしもの栄華をきわめていた平家一門も、壇ノ浦の藻くずと消えて、源氏の大將頼朝は全国の行政権と莊園の支配権をその手中に収めようと、諸国に守護・地頭を設置しました。

赤松氏は、村上天皇の第七皇子・具平親王の末えい、季房のとき、佐用郡赤松庄の守護職に任ぜられたのです。季房は自分の任地の名をとって、赤松姓をなおり、十三〜十五世紀にわたる大隆盛の礎をききました。赤松則村（円心・一二七七〜一三五〇）の頃には、赤松氏は播磨・備前・美作から因幡・摂津の一部（今の兵庫県・岡山県の大部分）を領する一大勢力となりました。

室町幕府は、赤松氏を幕府の要職・侍所の所司（長官）に任用して、重くとりたてました。

赤松一族は、赤穂郡の白旗城を本拠としましたが、ここ加西も、南北朝時代から室町時代（一三三六〜一五七三）の動乱期には、別所城・殿原城・小谷城・善防城等の赤松勢で占められ、芥田城・満久城・別府城・山下城・中野城・牛居城・田原城（千歳山城）・土器山城等も、すべて赤松に味方していましたので、赤松一色にぬりつぶされていたといっていすぎではありませんでした。

(二) 殿原城（笹倉城）（笹倉町）

今から約六百年余りも前の、南北朝時代のことです。

後醍醐天皇ごだいこによっておこされた建武の中興が、わずか二年で崩れさり、後醍醐天皇（南朝）側と、足利尊氏あしかががたてた光明天皇（北朝）側が対立して、全国いたるところで戦乱が続いておりました。

おりもあり。足利尊氏は弟の直義ただよむと仲たがいをして、おたがいにはげしく争いました。滝野町にある光明寺での攻防（観応二年・一三五二）は、中でも非常に有名です。

この時、揖西郡（龍野）黒崎山の城主・赤松肥前守左衛門尉朝範ひぜんのかみさきもんのかみあきのりとその父範資のりすけは、尊氏側について直義と戦い、大きな功績を上げました。そこで尊氏よりその恩賞おんしょうとして東播八郡の領地をもらいうけることになりました。

このため、赤松朝範は、住居を西播から加西郡有田庄ありたじょう（加西市殿原町付近）にうつして、殿原城を築き（城は当時南殿原であった笹倉町につくった）、自ら有田庄の地名をとって、有田氏を名のりました。

有田庄は、北は多可郡より丹波・但馬に通じ、南は印南より摂津・備前に通じる要路の地でありましたので、諸国の浪人たちの往来もことの他多く、その上、この地は一面の篠原でしたので、兵を伏せるのに好都合で、少人数で大勢の敵に対するのに地の利をもっておりました。

このため、朝範を城主とするこの殿原城は、東播の要として赤松諸城のうちでも重要な守りでした。

朝範は、また多可郡中町に段の城を築き、北方山陰の山名氏にそなえました。

しかし、文和四年（一二三五）、山名時氏が大軍を率いて播磨の地に攻め寄りましたので、朝範は印南でこれをむかえうたねばなりませんでした。殿原城を離れての戦（いくさ）でもあり、多勢に無勢、さしもの朝範勢もなかなか戦果を上げることができません。

戦いはよいよ味方に不利で、勝ち目がないとさとした朝範は、こうなったからには敵の大將と刺し違えて死のうと、山名師義をねらいうちしましたが、そのためにかえってその従兵にねらわれ、ついに傷つけられて倒れました。敵は、この時とばかりに朝範の首を刺しつらぬきました。

しかし、さいわい敵兵は朝範が死んだものと思って、その場にすてたまま引き上げましたので、朝範は息をふきかえし、殿原城に帰りつくことができたのです。

その後、朝範の子範康のりやすが父の後を継いで、二代目城主となりましたが、度重なる戦乱で二代にして殿原城は滅んでしまいました。

これをおしんだ赤松一族の赤松兵庫頭弥四郎祐利が、有田（在田）氏の遺業をつごうと、殿原城を修築してここに住み、笹倉城主となって、笹倉氏を名のりました。笹倉氏は五代も続いて武威を遠近に輝かせ、領民に慕われました。

天正六年（一五七八）三月のはじめ、羽柴秀吉は中国平定のため、七千五百の軍勢を率いて京都をたち、中国の雄・毛利をうったため播磨に兵を進めて来ました。秀吉は東播磨地方に強い勢力を持っていた赤松一族の三木城主別所長治を、毛利攻略の先兵に使おうとしました。しかし三木方は、この秀吉の頼みを受け入れませんでしたので、三木城を中心に二年にもわたるはげしい戦がはじまることになったのです。

実は、五代目笹倉城主、兵庫頭則賢もこの三木の合戦に長治を助けるため駆けさんじたのです。長い苦しい籠城のすえ、三木方は天正八年（一五八〇）一月十七日、悲壮な自害をすることになるのですが、この時、則賢も一族とともにいさぎよく切腹しました。

まだ幼かった則賢の子則知は、父の自害した短刀を小さい胸にしっかりとだしめ、乳母に助けられてひそかに城をぬけ出し、江州（滋賀県）の長浜に身をかくしました。則知は時期の来るのを待ちましたが、はたすことができず、長浜の地で世を去りました。

その子平左衛門は、父の遺言を守って、祖先の功業の地、播州笹倉に帰って来たのです。旧笹倉城の一隅に家を立て、武士をすてて農業にいそむかたわら、祖先をおまつりし、江州長浜にちなんだ長浜という姓を名のったのが、今の長浜家の先祖なのです。

今でも長浜家には、則賢が三木城で自害した時の短刀が、家宝として大切に受けつがれております。

(三) 小谷城と善防山城

五代目、白旗城主赤松上総介義則は、小男で人は「三尺入道」と呼んでいましたが、どうしてどうして非常に勇猛果敢な武將で、山名氏清が時の將軍足利義満に叛乱をおこした明德の乱（一三九一年）には、將軍方について山名勢を相手に、「義のために命をすてて戦え！、人に先をこされるな！」と部下を激励しつつ、松の字の赤旗をうち振って、まっ先に敵の陣におどりこみ、さんざん暴れまわって大手柄を立てました。

この義則には九人のいづれ劣らぬ勇敢な息子がいました。長兄の満祐は、四代目白旗城主光範の五男を養子として迎えたものでしたが、義則の後をついで六代目白旗城主となりました。そこで次男（實際は長男）の祐政は、加西郡北条庄小谷村（加西市北条町小谷）に城を築き、小谷城主となりました。

北条は摂津・備前より播磨南部を通して但馬・丹波・京都へ通じる中心の地で、そのため、但馬口・丹波口より侵入する山陰の山名氏ににらみをきかすには最もふさわしい所でした。

しかも小谷城は、播州平野を眼下に見おろし、遠く瀬戸内海をも見たせる位置にあって、南北は険しい山の斜面で切り立っていますから、自然の要害でありました。この小谷城の二代目城主には、六男の直操がなりました。

さて、三男の祐尚は飾西郡（姫路市）英賀城主に、四男義雄は揖西郡（龍野）木ノ山城主に、五男則友は

加東郡三草城主となり、七男祐之は加東郡岩屋城主になりました。そして八男の則繁が、加西郡笠原庄下里村の善防山城主になったのです。さらに九男則之は有馬郡北山城主にと、それぞれ兄弟が要所要所に城を築き、赤松の守りをいよいよ堅くしました。

(四) 嘉吉かきつの乱

嘉吉元年（一四四一）、京都で前代未聞の大事件が起こりました。時の將軍足利義教が、播磨守護職の赤松邸で切り殺されたのです。国中がおおさわぎになりました。

ことの起こりは、こうなのです。將軍足利義教という人は、もともと非常に陰險いんけんな人で、その上たいへんなわがまま者でした。ちょっと笑ったというだけで、馬鹿にしたといって、その大名の所領をうばってしまったり、自分の地位を守るために、たくさん有力な大名を暗殺したり、攻め滅ぼしたりしました。それで見んなは、義教のことを「悪將軍あくしょうぐん」と呼んでおそれました。

一方、赤松氏は、播磨・備前・美作みまさかの三国を領した有力な大名でしたが、この領地を將軍が取りあげようとしているといううわさがありました。そればかりか、

「力のある大名は、次々に征伐されるだろう。この次に亡ぼされるのはきっと赤松にちがいない」という見方が世間に広がっておりまして。

そこで、赤松満祐は、先手を打って將軍を殺してしまおうと、だんだんに決心を固めるようになったのです。

六月二十四日（新暦七月二十一日）、それは非常に暑苦しい日の午後六時頃だったのです。京都の赤松満祐の邸では、將軍義教をむかえて、当時流行の猿樂鑑賞さるがくかんしやうの宴が盛大に開かれていました。將軍はごきげんでした。二献にけん・三献と盃を重ね、面白い猿樂にうかれて、大名たちと酒の味を楽しんでおりました。

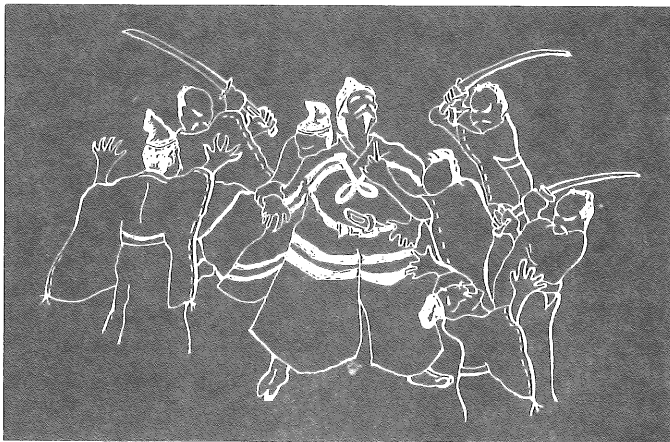
宴たけなわの時、突然、奥の方から雷鳴のような喚声がとどろき、

「馬が走った」

「馬が逃げた」

と叫びながら、赤松の家臣たちが右往左往して、門の戸をいっせいに閉じてしまいました。

馬を裏庭にはなつて、さわぎたてたのは満祐の計略だったのです。



驚いた將軍が立ち上がろうとしたとき、後方の障子が手荒く引き開けられ、大刀をふりかざした武士数人が、ドカ・ドカと入り込んで来ました。そのうちの一人が、將軍の右手をグイッと引きつかめました。この人こそ、事件の計画を立てその指揮をした善防城主赤松左馬則繁だったのです。満祐の子、教康がすぐ左手をおさえ、

「こはそも何事！」

と叫ぶ將軍の後から、安積行秀が刀を振ってその首を打ち落としてしまいました。

全く「あっ」という間の出来事でした。余りのことに將軍が目の前で殺されているのに、お供の武將たちはただ呆然と立ちすくんでいるだけでしたので、ほとんどの人が、刀を振って打ちかかることもなく、その場で討死してしまいました。

下手人は誰か、張本人は誰なのか、余りの出来事に生きのびた人たちも判断力を失っていたのです。幕府では、すぐに追手をさし向けることさえできませんでした。

赤松方は、將軍の首を取ることでしか目的でしたので、生きのびることなど、もうとう考えてはいませんでしたし、目的をとげれば切腹とかくごを決めていたのですが、寄手がいっこうにおしよせてくる気配がないものですから、

「それなら国へ帰って、力のかぎり抵抗してやろう」

ということになりました。

それぞれの屋敷に火をかけた赤松一門は、五百余騎、堂々と行進して京都から落ちていきました。

(五) 幕府の赤松攻めにもくじけなかった善防の殿様

余りのことに赤松一門の都落ちを、ただ果然と見送った幕府方も、ようやく一ヶ月近くもたった七月二十日になって、やっと赤松追討のおふれを全国に下しました。

さあ、たいへんなことになりました。將軍を殺したのですから、諸国の軍勢がドツとばかりに播磨の四方から攻めよせて来ました。八月十三日には細川の三万六千騎が山陽路を、山名の二万騎が山陰路をそれぞれ播磨に向って出発しました。

一方、赤松方は、書写の坂本にある掘ノ城に集まって軍議を開きました。善防山城主則繁はもちろん、小谷城主直操、別所城主祐則など、播州の赤松一族四千が馳せ参りました。

幕府軍の中で一番戦意に燃え、何としてもこの機会に赤松を攻め滅ぼしてやろうと、ねらっていたのは宿敵の山名氏の軍勢でした。



この山名氏の軍勢を迎えうったのが、善防山城主則繁と小谷城主直操だったのです。則繁は穴栗郡戸倉で因幡街道から攻め寄せる山名軍を、直操は神崎郡大山で但馬口から播但街道を南下してくる山名勢を防ぎました。

二代目小谷城主の直操は、実はお坊さんでしたが、衣を鎧にかえ、手杖を大長刀に持ち替えて、一千の軍を率い応戦しました。しかしむろん歯が立つはありません。泣く泣く書写坂本へ引き返しました。

その頃、明石人丸での戦に破れた満祐らは、揖西郡（龍野）木ノ山城に籠城しましたが、二万以上の敵に囲まれてはどうしようもありません。赤松満祐は、弟義雅らとともに城に火をかけて切腹しました。この時別所城主の祐則もいっしょでした。時に嘉吉元年（一四四一）九月十日、ただの三日にして播磨・備前・美作にその勢力をほこった赤松一門とともに、木ノ山城は落城してしまいました。

木ノ山城の落ちたことを知った小谷城主直操も、はるか木ノ山を仰ぎながら自害し、小谷城も二代にして亡ぶことになったのです。

一方戸倉で山名軍と戦った善防山城主則繁は、武勇の誉高はまれいつわものだけあって、さんざん山名軍をてこずらせましたが、何といっても多勢に無勢、味方はことごとく敵に蹴散けちられ、討死してしまいました。則繁もこの時切腹したものと考えられていました。

ところが、実は赤松を再興しようとひそかに逃れ出し、室津港から舟に乗って九州に出、対馬から朝鮮まで渡っていたのです。元氣者の則繁は、朝鮮の一部を占領して領国としてしまいました。だんだん力をつけた則繁は、文安五年（一四四八）、七年ぶりに部下を率いて再び九州に上陸して来たのです。

手はじめに大内氏の大軍と戦いましたが、兵力の差はどうすることもできません。結果は大敗でした。播磨に逃れて来ましたが、宿敵山名氏が占領していても足も出ません。

しかし、則繁は決してあきらめませんでした。河内の国、畠山氏を頼って再起しようと、当麻寺たいまじの近くのかくれ家で、いろいろ苦心していましたが、敵の発見するところとなり、家をいくえにもとり囲まれてしまいましたので、いさぎよく切腹しました。

(六) 赤松再興と南帝塚（中野町）

嘉吉の乱で赤松氏が滅亡した後、善防城の赤松則繁や他の遺臣たちも、再三赤松再興を謀りましたが、いずれも失敗しました。

その後、赤松の家臣中村氏の居城であった河合郷（小野市河合と加西市網引・田原・中野・繁昌）金鈞瓶城の家来、石見太郎左衛門尉雅助は、嘉吉の乱で滅んだ主家を復興したいと苦心のすえ、つてをたよって京都の三条右大臣実量に仕えました。いっしょうけんめい働いて、実量の信頼を得、機会のあるたびに赤松家の由緒を話すとともに、何とか再興したいという気持を伝えておりました。

これより前、北朝側は天皇の位を示す三種の神器のうち、「曲玉」を南朝側にうばわれていましたので、雅助は、

「わたしどもが、何とかしてその曲玉を取り返して来ますから、どうか赤松の今までの罪を許して下さい」と申し出ました。それを聞いた右大臣は

「曲玉を取ってくれば、かならず赤松の罪を許し、家の再興を取りはからってやろう」

と約束しました。雅助は喜んで河合に帰り、河合屋敷にかくれ住んでいる金鈞瓶城主の遺児、中村小四郎助直にこの事を報告しました。

ちょうどその頃、この河合屋敷には赤松の子孫政則も身を寄せておりました。みんなは相談の上、吉野（南朝）に入って事を挙げることに決定しました。そこで二十九人の赤松にゆかりの者たちが、吉野に入りこみました。それぞれ変装して名をかえ、南朝方につかえました。

長祿元年（一四五七）十二月二日の夜、折りから降りしきる大雪をさいわい、吉野御所を襲い「曲玉」をうばいましたが、大雪に道をふさがれて迷っている間に、追い打ちにあい多くの者が討死し、「曲玉」は取り返されてしまいました。

しかし、翌年の八月二十七日の夜、再び御所を襲い皇子の首を取り、「曲玉」をうばいました。助直らは命からがら逃げ帰って、京都にたどりつき、右大臣に「曲玉」と敵の皇子の首をさし出しました。右大臣は、すぐこのことを北朝の天皇に報告してくれました。天皇は、

「主家を思う家来の心、あっぱれである。手柄にめんじて赤松の罪を許し、子孫の赤松政則に播磨の国と加賀の国の半分を与え、赤松の再興を許す」

といわれました。

中村小四郎助直は、この手柄により河合郷を領地として



もらい、新しい金鈎瓶城の城主になりました。

しかし、何の罪もない皇子を殺したことを悔い、皇子の首を加西郡中村（今の中野町）の清慶寺に、立派なお墓をつくって葬り、大勢の僧を集めて盛大な法要をおこないました。この皇子の墓が、清慶寺の南帝塚として今に残っているのです。

赤松政則はその後、応仁の乱（一四六七年）には細川方に味方して手柄を立て、長亨二年（一四八八）には、宿敵山名氏を破って赤松氏の旧領、播磨・備前・美作の三国を得て、完全に赤松再興をなしとげました。

（七） 領民からしたわれた小谷の殿様（北条町小谷）

嘉吉の乱で亡んだ北条の小谷の城を再興したのは、赤松形部少祐ぎようぶしょうゆうすけなお輔尚です。

彼はこの戦乱で討死したたくさん侍や、戦いのまきぞえとなって亡くなった領民の供養のために、北条の酒見の森にたくさん石仏をつくらせたのではないかと言われています。そしてこの石仏を「五百羅漢」と名づけました。石仏には、亡くなった人たちによく似た顔がありますので、土地の人たちは、

「親が見たけりや 北条の西の 五百羅漢の堂にござれ」

と歌いました。

赤松祐尚は、領地を治めるには祖先を尊び、民の心を清く、正しくするのが一番大切だと考えて、城のすぐ下に禪宗のお寺を建てました。赤松氏は祖先から禪宗を信じていたからです。そして寺の名は、城主の名と、朝夕陽光を受けて立つ城の老松にちなんで、「祐尚山陽松寺」と名づけました。

また、住吉神社を建てなおしたり、酒見寺には、お坊さんの勉強する建物「講堂」を寄進しました。

それと同時に、祐尚は、領地を豊かにするために、田畑を正しく長方形にしようと、縄を引いて小谷村の耕地整理をしました。その土地を今でも「小谷縄手こたなわて」と呼んでいます。

また、市場を開いたらみんなが便利だろうと考えて、毎月二と六の日の六回、市場を開きました。この場所を今でも「古市場」と呼んでいます。ちょうど、今の北条中学校の場所です。人びとは自分の土地でとれた野菜や米、薪などを塩や干魚と交換したりしました。そして

「田舎いなかなれども北条は都、月に六斎ろくさい（六回）市が立つ」と歌って喜びました。

また、馬は農耕や、戦いの時に必要ですので、城の裏の



谷に放牧しました。今でも牧谷（鴨谷町）と呼んでいます。

そのころはよく饑饉ききんがありましたので、豊作の時に米を貯えて、不作の時には粥かゆにして人々をやしませんでした。この米倉を人々は「宝蔵たからぐら」といいましたので、今でもこの土地を「宝たから」と呼んでいます。谷町の「宝」がそれです。

このようなたいへん立派な殿様でしたが、良いことばかりは続きません。天文十一年（一五四二）一月十四日のことです。山陰あまこの尼子氏が大軍をひきいて播磨に攻め入りました。播磨の城主は降参する者がたくさんいましたが、小谷の殿様は、正義のために勇ましく戦いました。そして谷町の八幡さんの近くの池で討死しました。今から四百三十年ほど昔のことです。小谷の赤松氏は亡びました。そして今でも、その池では不浄の物（きたないもの）は洗たくしないそうです。

（八）別所城の興亡（別所町）

それは、平安時代の終わりの頃に逆のぼります。

赤松氏の祖、季房の孫、頼清よりきよは、幼名を太郎丸といい、二十歳の永暦元年（一一六〇）に加茂郡別所村

（加西市別所町）に城を築きました。そして地名の別所をとって別所氏を名のったのです。これこそ後年、赤松氏が加西を中心に東播の地に大きな勢力を持つようになる礎いしづえであり、別所氏自身にも天正八年（一五八〇）、三木城で赤松一門と共に滅び去るまでの、実に四百二十年にもわたる興亡の歴史の幕開けであったのです。

頼清がその居城を作るのになぜ別所を選んだのかは、定かではありませんが、東播守護職を命ぜられた別所氏が、今の加西・加東・多可・神崎に渡る領地を守るには、この地が最も適していると考えたからに違いありません。

加西は上代より多くの人々が住みつき、古墳時代などには、広い播磨の中でも最も文化の進んだ地域でした。この当時でもよく開けた土地であったのでしょうし、別所は頼清のまかされた領地の中心で、しかも全体を見通しやすい位置にあったからでしょう。

阿弥陀寺の裏山の城跡に登って見ますと、城を築いたと思われる平坦な頂からは、龜山古墳の美しい山容や、中富の火とぼし山が手のとどきそうな位置に見え、これを越えて、遠く印南から瀬戸、淡路の島かげも見ることができます。東は加東・小野を経て六甲連山へと視界が開け、西は小高い山々が散在する神崎、姫路へと一望できます。しかも北は高く険しい山の連なりが後方の守りとなっているのです。

殿原城ができたのが十四世紀の中頃、小谷城、善防山城が築かれたのが十五世紀の初めですから、頼清が

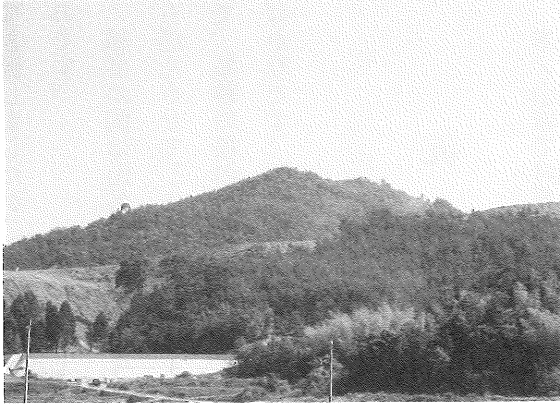
ここに別所城を築いて住んだのは、それより二、三百年も前のことになります。もちろん、赤松氏の東播における歴史の第一歩であったのです。

別所城は、加西・加東・多可・神崎にわたる二万貫の所領をもつ領主の居城として栄え、幾多の変遷はありましたが、後醍醐天皇に仕え戦功のあった敦光や、足利尊氏に従って名を挙げた敦則など、数々の名君を生み、十代約三百年もの長きにわたって領民からも尊敬を受け、親しまれておりました。

しかし、この別所氏も、赤松満祐のおこした嘉吉の乱で、他の赤松一族とともに、輝く栄光の幕をひとまず閉じることになったのです。

時に嘉吉元年（一四四一）九月十日。別所祐則は、木ノ山城に満祐らと籠城しましたが、勝ち戦にいさみ立った山名二万余の軍勢が、総攻撃を開始して、足もとから攻め登って来たのです。祐則は、部下とともに敵中に斬りこむこと数回、あたるをさいわい、切りまくり、さんざん山名軍をてこずらせましたが、大手・搦手、三方・四方より攻め登ってくる無数の軍勢には、とうてい勝目がありません。

満祐の自害を見とどけた後、さらに敵中に斬って出て、数十の敵兵を



なぎ倒しましたが、一族二十数名の武将とともに、燃えさかる城と運命をともし、はかない最後をとげたのです。

播磨の国は山名氏の所領となり、別所城も荒れるにまかせて、やがて生い茂る樹木の下に武士の栄光の数々も消えうせてしまいました。そして今にのこるのは、「下屋敷」という地名や、「千石」、「別所」という苗字で、城跡の松の梢を鳴らして吹きぬける疾風は、いにしえの軍馬の響きにも似て、心なしか寒々と聞こえるばかりです。

(九) 別所の殿様と三木の合戦

本ノ山城で討死した別所城主、祐則には、当時十一歳の小治郎則治という男子がありました。

則治は山名氏の目をのがれて、ひそかに城をぬけ出し、山里に身をかくし成長しましたが、赤松政則が長祿二年（一四五八）、播磨と加賀の半分をもらって赤松を再興したとき、政則につかえその片腕となって、数々の戦功を上げました。特に山名宗全と細川勝元が争った応仁の乱（一四六七）には、政則とともに細川方について山名を討ち、則治は東播磨八郡を与えられて石高二十四万石の領主となりました。

そこで、三木に城を築いて釜山城かまやまと名づけ、その城主になったのです。この頃には築城の技術も進み、山城やまじろから平城ひらじろへとその手法も変わりつつありましたので、三木釜山城はにぎやかな城下町を持った新しいお城でした。

四代三木釜山城主別所安治やすはるの時には、三好長慶ながはるが將軍義昭よしかさをおそう事件があり、將軍は織田信長に助けを求めました。別所安治は、信長に援軍を送り、大手柄を立てました。別所氏はこのおかげで、名実ともに東播の雄として君臨くんりんするようになりました。

五代目別所長治ながはるの時です。織田信長は中国平定のため、羽柴秀吉を総大将にした毛利氏を討つ軍勢を、ここ播磨に進めて来ました。天正六年（一五七八）三月のことです。

秀吉は、加古川で播磨の国々の城主を集めて、毛利一族を討つ作戰會議を開きましたが、三木方と意見があわず、三木別所氏は毛利方に味方して秀吉と戦う決心をすることになるのです。

高砂城主・野口城主・神吉城主など、東播の多くの城主が三木城に人質を送りこんで、ともに戦う意志を示しました。この時、笹倉城主則賢も三木方につきました。山下城主浦上久松、田原千歳山城主高田政顕、野上城主岩崎源兵衛と、加西の武士はことごとく三木城にかけさんじたのです。

三木方は四月五日の大村坂おおむらさかの夜襲に大勝して初戦を飾りましたが、支えの城を落として三木城を兵糧攻ひょうかうぜめめにししようという作戰に出た秀吉軍に、四月十三日、野口城が落とされ、七月二十六日、神吉城が一ヶ月にも

わたる激戦のすえ落城し、八月十日には志方城、さらに十月には高砂城も落ちて、頼む支えの城をことごとく失いました。

こうして三木城は、三万以上もの秀吉軍にいく重にもとり囲まれ、毛利援軍の道を絶たれた上、食糧補給の望みも全く失い、総力を結集した天正七年（一五七九）二月六日の平井山の合戦、九月十日の平田、大村の決戦にも破れて、もはや活路を開くすべも失なっていました。

城の中では、年の暮近くなると、長い籠城で食糧がなくなり、草の根、木の皮はもちろん、大切な馬を殺して肉を食い、ネズミや壁土の中のわらまで食って飢^{うえ}をしのぐという悲惨^{ひさん}なありさまになりました。

「自分たちの食べるものを少しでも夫や父に」

と、しんぼうして来た女や子どもから飢死者が出はじめ、塀の下や、狭間^{はざま}の陰^{しかばね}に屍^{しかばね}の数が日とともに増えていきました。

年が明けて、天正八年（一五八〇）一月十七日、籠城すること一年と十ヶ月。赤松頼清が加西の別所に城を築いて別所氏をおこしてから、十五代、四百二十年の歴史を閉じる悲壮な最期の日がおとずれたのです。

ここで降伏すれば、赤松以来の武門の名を汚すことになり、かといって城を枕に討死すれば、ここまで義を守って頑張ってくれた家来や領民の命をいたずらにそまつにするだけであると考えた長治は、自分たち城主一族がみんなの身代わりになって自害^{むくい}することがせめてもの報である、と、秀吉に書状を送って、

「自分の命にかえて、みんなを助けてほしい」と頼みました。

秀吉は長治のこの立派な心をほめ、将兵や人々の命を助けることを約束した返事とともに、酒・さかなを城中に送ってねぎらいました。

長治は、城に残っている者を一人残らず本丸の大広間に集め、悲しい別れの宴を開きました。くみかわす盃は涙にぬれ、そこそこからすすり泣きの声がもれました。寄手の軍勢も、今は声もなく息をひそめて、悲しみに沈む三木城を見守っていました。

城主一族は、木浴して身を清め、白装束をきちんとつけて、定め座につきました。

夫人や子どもたちの自害を見とどけた長治は、

「今はただ 恨みもあらじ 諸人の 命に代る わが身と思えば」

と、辞世を残して弟友之とともに切腹しました。

長治二十五歳、友之二十一歳の春でした。

(十) 加西武士の意気を示した岩崎源兵衛・浦上久松

天正八年（一五八〇）といいますが、今から四百年も前のことです。

その頃、播磨は大変なさわざでした。羽柴（豊臣）秀吉が攻めてきたのです。播磨の東半分を領していた別所長治は、領地の武士を三木城に集めて、秀吉と戦う決心をしました。加西も別所氏の領地でしたので、武士たちは別所氏に味方して三木城に立てこもりました。今からお話する中西の岩崎源兵衛も、山下の浦上久松も家来を率いて三木に入城しました。

最初は勇ましく戦っていた三木勢も、お城の中の食糧がなくなって、だんだん弱って来ました。それでも降参する者もなく、草の根や木の皮、しまいには壁土の中のわらまで食べて戦いました。絶食十数日、餓死者は次々に増えて行きました。

天正八年一月十一日、秀吉勢は鷹の尾曲輪たかのまがわに攻め込みました。三木勢は絶食して二十日にもなり、よろいを着て働ける者は一人もいません。三百人余りの若侍は、寒中にもかかわらず、上半身裸のまま、切先をそろえて切って出ました。しかしながら、永い間の絶食で、みんなヒョロ、ヒョロでしたので、多くの敵にかまれて、全員討死してしまいました。老武士たちは、雑兵の手にかかるよりはと三十六人輪になって、腹かき切って自害いたしました。

この時です。城の中から、騎馬武者が十二人、馬の首をそろえて、秀吉勢のまただ中にかけ入りました。四百人の寄せ手の兵が、驚いている中を、この十二騎は、サッと四騎ずつ三ヶ所に別れ、前に後に、右に左に飛びまわり、あたるをさいわい切りまわります。これを見た敵の大将は、

「わずかに十二騎、中に包んで散らせよ」

と、さらに三百余人が応援にかけつけました。しかし十二騎は少しも騒がず、馬の首を並べて大声で、

「われわれは、別所氏の侍、岩崎源兵衛・浦上久松なり、今日は討死を決心したり、さあ見参つかまつらん」

と呼ばわり、さっと三方に分かれては敵を討つこと数知れず、ゆうゆうと城に引き上げました。

しかし、三木城は、とても勝つ見込みはありません。城主は、こうなった以上、せめて自分が自害して、今日きょうまでよく働いてくれた部下を助けたいと考え、一月十七日、みごとに切腹してしまいました。これを見た岩崎・浦上ら十八人、太刀を抜き放ち、あたるにまかせて切りまくり、時はよしとサッと引き上げ、一同列を作って腹をかき切り、



同じ枕に討死しました。

岩崎源兵衛・浦上久松は、実に勇ましい加西武士でした。

（学校厚生会「郷土の城物語東播編」）

なお、岩崎源兵衛の位牌は中西北町の常泉寺にまつられており、この寺の近くの高台に源兵衛の墓と見られる碑が建っています。

江戸時代		安上・桃山時代		戦国時代		室町時代		南北朝時代		鎌倉時代		平安時代	
1600		1600		1500		1400		1400		1300		1100	
03 江戸幕府 家康成立		00 関ヶ原の合戦		77 守護大名勢力増大		92 南北朝統一		91 義則山名氏と戦う		81 弘安の役		92 頼朝将軍	
80 三木城落つ		77 応仁の乱おわる		67 応仁の乱おこる		83 氏則南朝につき幕府		83 氏則南朝につき幕府		74 文永の役		85 平氏滅亡	
78 室町幕府亡ぶ		69 出陣		58 赤松政則再興		50 尊氏弟の直義と戦う		50 尊氏弟の直義と戦う		32 貞永式目制度		67 清盛太政大臣	
68 織田信長上洛		43 鉄砲伝来		41 嘉吉の乱		34 建武の中興		34 建武の中興		21 承久の乱		59 平治の乱	
42 小谷城亡ぶ?		27 赤松満祐足利義持と		27 赤松満祐足利義持と		38 尊氏将軍		38 尊氏将軍		56 保元の乱		56 保元の乱	